

『貧乏物語』の想源

杉原四郎

は し が き

『貧乏物語』（弘文堂、1917年）は、河上肇にとって、数ある彼の著作のうち、『自叙伝』とならんで、最も多くの読者に迎えられた二大代表作であった。

『貧乏物語』は、『大阪朝日新聞』に連載された（1916年9月11日～12月26日）こともあって、学生のみならず一般知識人、政治家、実業家、公務員、社会運動家にもひろく読まれた反面、小泉信三や福田徳三らの書評によって、学界でも大きくとりあげられた。²⁾その後河上がマルクス主義に傾斜するにつれて本書の影響力はおとろえていったが、戦後いちやく岩波文庫で発刊される（1947年9月）や、戦後日本におけるめざましいマルクス主義のリバイバルの中で増刷を重ね、1986年5月には第54刷が発行されるにいたった。本書を多くの角度から総合的に論じた単行本が出たり、³⁾本書を現代的問題意識から再検討しようとする試みが現れたりして、⁴⁾本書に対する関心は現在でも決してなくなっていない。

私もこれまで本書についてたびたび論ずる機会をもってきた。⁵⁾しかし本書で河上は、一体何を読者に訴えようとしたのか、河上の本心というか本当のねらいというか、それはどこにあったのか、そして本書は思想家・研究者としての河上にとってどういう意味をもっていたのか、⁶⁾こういう問題についてはまだ論じたりない点があるように思われる。日本経済学史上田口卯吉の『日本開化小史』とならぶ「古典」とされる本書を、⁷⁾あえてふたたびとりあげる所以である。

I

河上肇は1915年2月26日に1年4カ月の欧州留学を終えて神戸港に上陸した。同年3月京大法学部教授に昇進、5月に大阪朝日新聞社友となり、6月から朝日新聞に「日本民族の血と手」、10月から「婦人問題雑話」、を連載する、また12月には実業之日本社から留学中の文章をまとめた『祖国を顧みて』を発行している。河上はその頃京都から東京の榎田民蔵に手紙を出している（1915年12月5日付け）が、それは榎田から河上に来た封書の行間に河上が書き込んだものを送ったものである。この手紙を河上は榎田ふき氏から1939年7月に見せられ、「赤い鉛筆で書き入れてある」自分の返事を写しとった。その中に、つぎのような注目すべき文章がしるされている。

「小生此頃貧民の事ばかり考へ居候。勉強もせうと思ひますが、追々社会主義の伝道にも力を分つ積りです。その中『現の世より夢の国へ』と題し、社会主義論、大阪朝日に連載可致と存居候⁸⁾」。

この文章に河上は、1939年につきのような注を書き加えた。

「『追々社会主義の伝道にも力を分つ積りです』と言っているのは、私の文筆生活の一転期を劃するものとして、私にとっては興味がある。『現の世より夢の国へ』などと題する続き物は、遂に書いたことは無かった。約一年後に大阪朝日に連載した『貧乏物語』が、この時の思惑の実現されたものかも知れない⁹⁾」。

河上は留学に出発する直前にすでに法学博士となっていた。留学を了えたために教授に昇進する二つの条件は完全に備ったから、1915年3月に教授のポストを手にしたのは当然で、これで彼は学内的には自分の研究と一致する講義をすることができるようになり、学外では新聞や雑誌に評論的文章を発表する自由も確保することができるようになった。この時点で彼の門下生第一号であり気心のしれた榊田に「社会主義の伝道」にのり立す決意表明をしても不思議ではない。不思議なのはなぜ「現の国より夢の国へ」が『朝日新聞』に書かれなかったか、あるいはそれが『貧乏物語』と題名をかえて（最初意図した内容までかえて？）発表されたのはなぜか、ということである。

河上は『貧乏物語』の執筆をはじめるまでに、いろいろの機会に講演を行っており、そのうちのいくつかは講演の内容の記録ものこされている。それらを見ると、『貧乏物語』の内容の一部を予告したようなものもある。そしてそれらのうちで最も注目される講演は、1916年2月18日に浪華小学校で行われた大阪市主催の商工講話会における「貧困」と題するものである¹⁰⁾。

河上はこの講演で、これまで自分の見る夢の世界と自分の住んでいる現の世界には完全なる連絡がなく、どうして夢の世界を実現すべきかについて疑を懐いていたとのべ、つぎのように語っている。

「近頃になって初めて此の現の世から其の夢の国に通り越す坂路を発見したのである。其の坂路は確かに困難な路には相違ないけれども、我々は是非奮発して通り越さなければならぬと云ふ事をば、今度の大战が始まって以来の国々の有様、殊に独逸の国民経済の有様を見て、次第に痛切に感じて居る訳である。そこで今日は私共が此の現実の社会の事を調べて居る間に、何時の間にか理想の世界に這入り込む其の間の消息をば、今晚与へられた30分の時間内に於て、成るべく簡単にお話をして見やうと思ふ¹¹⁾」。

以上の序言のあと、河上は本論に入らず「現実の世に於て最も悲しむべき現象の一つ」は貧乏人が非常に多いことであるとし、貧民の定義について語った後、イギリスにおける貧民の現状がロントリーの調査であきらかになったこと、その現状が国民の体格の悪化を通じて国家社会にどんなに大きな害毒を流しているか、その対策として食物公給条令が成立したことなど、主としてイギリスの現状についてのべる。そしてこの貧困は果して根絶し得べきものかという問題にうつり、社会の生産力は非常に進歩しているのだから、機械の「掃除をして、油が切れている所へ油を注がねばならぬ」が、「是れだけのことである、然うすると其所に私の申す夢の国が開けてくる」といい、講演の結びに入ってそこでつぎのようにのべている。

「丁度今度戦争が始まってから以来、独逸のやり方を見て居ると、恰も私が度々夢で見た所の

其の世界に似たやうなことをやって居る、而して独逸は今八方から敵を受けて、最初から直ぐに弱るであらうと多くの人に想像されて居るに拘らず、少しも屈しない、益々壮んに戦って居るのである、という所以は、私の考へる所によれば確かに此の点にあると思ふ。即ち今日独逸の社会政策を見れば、丁度経済界に濁った塵埃を除け、切れた油を注ぎつつやって居るのである。此の点に於ては我々の頗る羨むべき政策を執っている、此の事は我国に於ても大いに鑑みなければならぬと思ふ、これが即ち文明の使命であり、又現実世界から理想界に進む所の通ひ路である」¹²⁾。

見られる通り、この講演は『貧乏物語』の内容を要約したものであり、この時点ですでに『貧乏物語』の構想が固まりつつあったことをそれはしめしている。だがこの講演と『貧乏物語』とは大きなちがひがあることも事実である。まず『貧乏物語』ではロイド・ジョージの活動を中心にイギリスの社会政策が強調され、ドイツのそれは副次的にしかとりあげられていないのに、講演では逆にドイツの社会政策に力点が置かれている。第二に『貧乏物語』における核心的主張である人心改良策としての富者の奢侈抑制論は講演では全くふれられていない。最後に河上が講演で「現実世界から理想界に進む所の通ひ路」として提唱しているのは社会主義ではなく社会政策である。『貧乏物語』でも実質的には社会政策が現実の改善策として重視されているが、立論のすすめ方の中では社会主義が現下の重要問題として河上に意識されていることが明らかである。ところがこの意識は講演からはうかがうことはできない。河上が榊田あての手紙でのべた「社会主義の伝道」とか「社会主義論」とかの言葉は、決して単なる社会政策のことではないであろう。とすればこの講演は、『貧乏物語』とも「現の国から夢の国へ」とも基本的なところでずれているのではなからうか。

河上は「貧困」の講演をするとき、その内容を書きしるした原稿またはメモを持っていたにちがいない。30分の限られた時間の中で、おそらくその原稿のすべてを話したのではなく、適宜要約したりふくらましたり、切りすてたりしたことであろう。だから私達が雑誌に公表された講演記録だけで河上の本来の意図を論じるのは危険であろう。もし河上の書いた原稿またはメモが残っておれば、『貧乏物語』の原型をしめすものとして、貴重な資料となるであろう。

II

河上はやはり、1915年の後半から1916年8月頃まで、日本の各地で講演をしていた時期に、講演のためのメモを書いていた。メモは結局文章化されて活字にならなかつたけれども、メモそのものは河上家に残っていた（京大経済学部の河上肇文庫所蔵）。「現の世より夢の国へ」と題し、ペンで縦書きのこのメモはノートの用紙に一枚12行にしるされた22枚のものであるが、表紙に「棄稿」と書かれている。このメモについて河上が明白に言及しているものはないが、「河上肇より榊田民蔵に送りたる書簡集」の1916年7月18日に榊田へ送った封書に注記したつぎの文章の中にある「私の用意したノート」が、これを意味しているのかもしれない。「小生八月上旬四国に渡り、二ヶ所ほど講演を終へて帰省、二十日頃までは郷里岩国に滞在可致と考居候……」という河上の手紙の箇所につけた註である。

「書中に四国で講演とあるのは、阿波の徳島に近い小松島と愛媛の松山とでなした講習のことで、その時に私の用意したノートは、後に「貧乏物語」の名で私が『大阪朝日』に連載した読物の素材となったものである¹³⁾」。

河上は八月の上旬に小松島と松山で講演をしたあと、中旬には郷里の岩国にうつってそこで滞在するが、その間岩国小学校で「現代の経済」と題して4日間の連絡講演をした。残念ながら四国や岩国での講演の内容をつたえる記録はのこされていない。だから「現の世より夢の国へ」というメモがこれらの講演のためのノートであるかについての確証はないのだが、メモの内容をみると、間違いなさそうである。そしてその内容からみて、メモの執筆は、八月より数カ月さかのぼって、京都や大阪で講演していた頃になされた（すくなくともその初稿は）のではないかとも思われるのである。

22枚のメモのうち表紙と最後の一枚の貧民統計表とそをのぞく本文の20枚は、最初の3枚が序言、最後の貧困対策をのべた結論部分が最後の2枚で、その中の15枚が本論にあたる。

序論の部分を『大阪商工時報』にのった「貧困」の序言の部分と比較すると、殆んど全く同一の文章である。メモの冒頭のつぎの文章「私ハ寝テ居テ時々夢ヲ見ルコトガアル。ソウシテ能ク同ジ場所ニ出会ウコトガアル。例ヘバ或ル阪路ナドヲ通ル時ニ、此处ハモウ度々通ッタコトガアルト心の中デ思ヒナガラ、其坂路ヲ通り越スコトガアル」を、「貧困」の当該箇所¹⁴⁾をみるとそのことがよくわかる。「貧困」ではこの調子で文章が続いていって、「そこで今日は……今晚与えられた30分の時間内に於て、成るべく簡単にお話をして見やうと思ふ」となるのだが、メモではそこはやや異なっていてつぎのように書かれている。

「ソコデ私共ハ此現実ノ社会ノコトヲ調ベテ居ル間ニ、何時ノ間ニカ理想ノ世界ニ入り込み其辺ノ消息ヲバ、可成他人ニモ分リ易イヤウニ書イテ何カニ出シテ見タイト思ッテ居ル、其ハ題シテ『現ノ世ヨリ夢ノ国へ』ト云フノデ、題ダケハ既ニ考ヘテ居ルガ、果シテ何時書クコトニ為ルカ、或ハ書カウ書カウト思ッテ居ル中ニ、人間ノコトデスカラ、急病ニデモ懸ッテ死ンデ仕舞フコトニ為ルカ、誠ニ当テニ為ラヌコトデアリアスガ、今日ハソノ夢物語ヲツ諸君ノ前デシテ見タイト思フノデアリマス。昔カラ痴人夢ヲ語ルト申シマスガ々文字通りニコレカラ痴人夢ヲ語ル次第デアリマス」。

河上がこの序言の後半で夢を語ることにことさらこだわっているのは奇異の感を与えるが、メモの最後の夢を語る部分、そして講演の「貧困」ではカットされた部分（Ⅲで紹介）をよむと、河上がこだわった気持ちがわかるような気がする。

メモでは本論を「今ノ世ノ中……ハ誠ニ有リ難イ世ノ中デアルト同時ニ、又如何ニモ面白クナイ世ノ中デアル」という風にはじめ、「面白クナイ所……ハ後刻ニ譲リ……誠ニ有リ難イ世ノ中」という所をまずとりあげ、それは「吾々現代人ハ……夢想ダモシ得ザリシ全ク新ナル文明……ヲ成就スルニ足ルダケノ物質的材料ヲ充分ニ作り出シ得ルト云フ偉大ナル力ヲ具ヘテ来タカラ」だという。そして「私ノ年来の持論ノーツデアル」人間の特性としての「道具ヲ製造スル能力」とそれが発達して「機械ヲ作り出スコトニナツタ」ことこそ現代の文明を作り出す基盤であることをのべる。このように現代の社会のあかるい側面をまずとりあげて後、河上はその暗い側面にうつり、多数の貧民の存在の問題に入る。これは「貧困」の場合と順序が逆である。だが貧困の問題に入ると、イギリスの現状について話がすすみ、さらに貧困がいかに「社会ノ大病デアル

カ」がモーリスの指摘で明らかになり、その対策として「貧困ナ小学児童ニハ公ケノ費用デ以テ食事ヲ給スル」事が行われるようになったことなどがとりあげられている。こうしてメモはつぎのようにつづく。「ソコデ吾々ハ……既ニ述ベタ如ク機械ノ發明ニヨリテ驚クベキホド其生産力ヲ増シテ来タ（ノニ）……多数ノ貧民が居ルノハ、之ハ何故デアルカ……此ノ不思議ノ現象ニ向ッテ疑問ヲ起シテ来ナケレバ為ラナクナル」。

そこでメモは本論の第三段階に入って貧困の原因を次のように論じる。「生産力ガ激増セルニモ拘ラズ、何故貧民ガ多イカト云ヘバ、其ハ生産組織ガ悪イカラデアル。……今日ノ経済社会デハ……衣食住ト云フ生活ノ必要品ヲ作り出ス、此ノ大切ナ事業、軍備ヨリモ教育ヨリモ先ズ第一ニ大切ナ此ノ事業ガ、自分ノ金儲ノコトばかり考ヘテ居ル人々ニ一任シテアル。之ガ根本ノ間違ヒナノデアル」。

金儲ケノ為ニ事業ヲ行フ者ハ、「経済学デ云フ所ノeffective demandヲ」顧慮して行うのであり、「要求ハアッテモ、購買力ヲ伴ッテ需要ガナケレバ其ハ顧ミヌ」ところが経済学でいう「享樂遞減ノ法則」により、「必需品ニ対スル需要ニハ大凡ソ限りガアル（ノデ）……金持ノ需要ノ大部分ハ奢侈品ニ向ク。……ソコデ一方ニハ沢山ノ奢侈品ガ山ホド生産サレルト同時ニ、他方ニハ米モ食ハズ靴モ履カヌ人ガ居ルニ拘ラズ、米モ靴モ此ノ如キ生活ノ必需品ハ凡テ充分ニ生産サレルコトニ為ラヌト云フ訳ナノデアル」。

以上のようなこのメモの本論の論旨は、順序のちがいや省略されたところなど決して全く同一というわけではないが、『貧乏物語』の上篇「いかに多くの人が貧乏しているか」と中篇「何ゆえに多数の人が貧乏しているか」で展開されている論旨と、骨子においては同じである。そしてつぎの文章は、上篇・中篇を総括しつつよい下篇「いかにして貧乏を根絶しうべきか」にうつることを告げたもので、中篇の「七の四」にあたるところのものということができるであろう。

「之ニ依ッテ見レバ、今日一國ノ生産力ヲ左右スル全権ヲ握ッテ居ル者、天下ノ資力、天下ノ労働ヲ一定ノ事業ニ振り向ケルカラ有ッテ居ル者ハ、皇帝デモナク、国王デモナク、大統領デモナク、経済学デ云フ所ノ需要ヲ有ッテ居ル者、金力ヲ有ッテ居ル者デアル。併シ此大切ナル国家社会ノ生産力ヲ各個人ノ資力ニ応ジ勝手ニ支配セシメテ置クトイフコトハ、之ハ非常ナ問題デアッテ、今日ノ社会ノ大病ノ根源デアル」。

III

「現の世より夢の国へ」と題するメモの最後の2枚は、貧困をなくする為の方策如何、つまり現の国から夢の国への移行策についてのべている。これは『貧乏物語』の下篇「いかにして貧乏を根絶しうべきか」で論じられている問題である。『貧乏物語』では、貧乏根絶策として、(1)現時の経済組織を改造するか、(2)甚だしい貧富の懸隔を解消するか、(3)富者がその余裕あるに任せて、みだりに各種の奢侈贅沢品を購買し需要することをやめるか、の三種があるが、(1)と(2)は制度改造論（(2)の社会政策は発展すれば(1)に近づくのでひとまとめに考えてよい¹⁵⁾）であるのに対し、(3)は人心改造論であるが、河上によれば「制度しくみを運用すべき人間そのもの、国家社会を組織している個人そのものが変わって来ぬ以上、根本的の改革はできるものではない。……私はこ

の意味において、政治家の仕事よりも広い意味の教育家の仕事をば、組織の改良よりも個人の改造をば、事の本質上、より根本的だと考える者である」として、(1)や(2)をしりぞけて(3)をとる。「社会問題を解決するがためには、社会組織の改造に着眼すると同時に、また社会を組織すべき個人の精神の改造に重きを置き、両端を改めて理想郷に入らんとする者である」ともいいながら、孟子のいわゆる「恒産なくして恒心ある」ところの「士」のような「人間さえ輩出するならば、たとい社会の制度組織は今日のみままであろうとも、……貧乏根絶というがごとき問題も直ちに解決されてしまうのである。この意味において、社会いっさいの問題は皆人の問題である¹⁶⁾」とする。そして下篇12の2をつぎのように結んでいるのである。

「奢侈ぜいたくをおさゆることは政治上制度の力でもある程度はできる。しかし国民全体がその気持ちにならぬ以上、外部からの強制にはおのずから一定の限度があるということは、徳川時代の禁奢令の効果を顧みてもわかることである。それゆえ私は制度の力に訴うるよりも、まずこれを個人の自制にまたんとするものである。縷々数十回、今に至るまでこの物語を続けてきたのも、実は世の富豪に訴えて、いくぶんなりともその自制を請わんと欲せしことが、著者の最初からの目的の一つである。貧乏物語は貧乏人に読んでもらうよりも、実は金持ちに読んでもらいたいのであった¹⁷⁾」。

『貧乏物語』の読者は、このくだりを読んで肩すかしを食ったという感じをもった人があったと思う。河上はそのあと12の3から13の3までのお物語をつづけるのだが、読者の中にはこの最後の部分を、蛇足とはいわないまでもいささか気の抜けた文章を読んでいるという感じをもった人もあるのではなかろうか。

ところで「現の世より夢の国へ」は貧困根絶策として、どんな提案をしているのだろうか。ここで示されているのは、まさに『貧乏物語』でしりぞけられた制度改善策であり、スミスにはじまった経済思想の支持してきた個人主義・自由主義的経済制度を根本的に否定する制度を確立することによってはじめて貧困が根絶され、「夢の国」が実現されるというものである。メモの最後の二枚はつぎのように書かれている。メモの表紙に「棄稿」と書かれているのは、あるいはこの部分を河上が意識してあえてそう注記したのではないかとも考えられるほど、ラディカルな内容である。

「ソコデ最後ニ話ヲ夢ノ国ニ引キ入レテ、然ラバドウシタラ善イカト云フニ、私ハ此ノ天下ノ生産カヲ支配スル全権ヲバ、凡テ 天皇陛下ニ帰シ奉ルコトニシタイト思フ¹⁸⁾。恰モ維新ノ際諸侯が封土ヲ皇室ニ奉還シタヤウニ、今日ノ経済界ニ於ケル諸侯が其事業ヲ国家ニ奉還シテ、世俗ニ謂フ三菱王国ノ主人モ、三井王国ノ主人モ、其他一切ノ事業家資本家が悉ク国家直属ノ官吏トナリ、カクテ吾々六千万ノ同胞ハ億兆心ヲ一ニシテ働ク、悉ク全力ヲ挙ゲテ国家社会ノ為ニ働ク、其代リ其レゾレノ天分ニ応ジ必要ニ応ジテ国家ヨリ給与ヲウケテ、何人モ貧困線以上ノ生活程度ヲ維持スルト云フ、サウ云フ世ノ中ニシタイモノト私ハ切望シテオリマス。今日独逸ガ四方ニ敵ヲ受ケテ未ダ敢テ屈セザル所以ハ、戦時ニナツテカラ正ニ私ノ理想トスル所ヲ或程度マデ実行シツツアルガ為メデアアル。私ハ我国ガ平時ニアツテ此理想ヲ実行スルコト一日早ケレバ一日ダケノ利益ガアル、一日後ケレバ一日ダケノ損ガアルト確信シテ居ル。此理想ヲ実行スルノ外ニハ、此貧乏国ヲ救フテ欧米諸国ヲ凌グニ到ルノ策ハナイト確信シテ居ル者デアリマス」。

IV

ここにのべられていることに似た表現は、『貧乏物語』の13の1のつぎの文章、「今日私人の営業に属しつつあるものをことごとく国家の官吏にし、……商人や実業家の得るところの利潤はすなわち賞与であり俸給である」という風にかえるという「経済組織改造論者」の主張¹⁹⁾に通じるものである。またメモの中では戦時中の独逸がこの組織改造論を「或程度マデ実行シツツアル」としているが、『貧乏物語』でも1916年に公刊されたゼームス・ハルデー・スミスの『経済上の道徳』の序言から「開国以来……ドイツにおいては一個の社会主義的国家が実現されんとしつつある。すなわちただに一般食料品の価格が政府によりて公定せられおるのみならず、穀物、馬鈴薯、鉄道及び全国の工場も約六割までは、すべて政府の手によりて支配されておる」という記事を紹介するとともに、1916年発行のドイツ学術雑誌にのったミュンスター大学のブレンゲ教授の「経済発展の段階」から、冒頭のつぎの文章を引用している。「われわれは、1914年という年は経済史上の一転機を画するもので、全く新たな時代が、われわれの経済生活の上に、この年とともに始まったものと考えざるを得ざるに至った。そうしておそらくわれわれは、この新たな時代をば、第19世紀に行われた資本主義に対し、社会主義の時代と称せざるを得ぬであろう²⁰⁾」。

つづいて河上はドイツ政府が戦時下で「産業上すべての方面にわたって国有主義、国営主義」を実現しつつあるのみならず、「幸か不幸か、ドイツもイギリスもフランスも、国運を賭するの大戦に出会ったために、今や一挙にしておのおのその経済組織の大改造を企てつつある²¹⁾」とのべ、こうした欧州諸国の新動向に「よろしく今日において十二分の考慮を積むべきである……わが国では郵便、電信、鉄道はすでに国営事業であり、塩、煙草、樟脳等もまた政府の専売になっている。また水道、電燈、電車等の事業にして地方公共団体の経営に成れるものも少なくない。さればこの上さらに公営事業を拡張することになれば、個人にとっては次第に金もうけの仕事が減るので、一部の事業家にはずいぶん反対もあるであろうが、しかしほんとうに考えれば、一部の実業家を利するよりも、国民全体を富ます方が得策な場合がはなはだ少なからぬであろう²²⁾」という。

このように論を進めてきた後、河上は突然制度改革論を批判する方向に転換し、さきに引用したように「組織の改良よりも個人の改善²³⁾を」と主張する。これまでも社会主義という用語を使うことにはなはだ神経質で、ドイツの場合は社会主義ではなくむしろ国家主義だという弁明をくりかえしていた河上にとって、学術雑誌でなく、一般の新聞に連載する場合この点を警戒して論を進めることはもっともな配慮といえるだろうが、それにしても20世紀は社会主義の時代だとする主張を肯定的に引用した河上が、金持に奢侈の自制を説得することを以て足れりとするのは、「現の世より夢の国へ」の最後で明治維新の版籍奉還と同様の財産奉還が制度改革としてもち出されるのを読んだときの驚きよりも、ある意味ではむしろより大きいかもしれないであろう。

V

本稿の冒頭で紹介したように、河上は1915年12月に榎田民蔵にあてた手紙の中で「社会主義の伝道」をあらたにはじめるといふ決意を表現した。それでは一体その頃の河上は社会主義に関するどのような考え方をもっていたのであろうか。それを究明するために、19世紀末、つまり河上が東京帝国大学に入学した1898年ごろ以来の彼の社会主義思想の変遷をたどって見ることにしよう。

岩国・山口時代の河上には、社会主義への関心は多分なかったと思われるが、上京してから、彼は大学の講義を通じ、当時の新聞・雑誌や演説会などを通じて、社会問題の重大性にめざめ、それと同時に社会主義への関心を高めていった。その関心の高さは、東大を卒業する1905年ごろに発表された彼のいくつかの文章にはっきりあらわれているが、その頃の彼の社会主義論をまとめたのべたのが、1905（明治38）年10月1日から12月10日まで『読売新聞』に連載し、その後1906年1月に単行本として刊行（1906年9月に改訂第5版発行）した『社会主義評論』である。

『社会主義評論』は、序言で京大・東大の教授達の社会主義論がいかに程度の低いものであるかを痛烈に批判したあと、本論の第一部で「近世社会主義の起因」をとりあげ、その中で財力を重要視する思想が近世社会主義勃興の一大因とする。そして日本の社会主義者たちが「社会の皮相を觀て、人生の機微を解せず、余りに物質的に傾くを遺憾と²⁴⁾」する。第二部で「社会主義の主張」を吟味するが、諸種の社会主義のうち平民社一派にしぼって、その主張を(1)土地・資本の公有、(2)凡ての生産を公共的事業とする、(3)社会的収入の公平な分配の三点とする。そして第三部でこの「三大主張の起因及び批評」を論ずるのだが、その起因をつぎのように要約する。「曰く土地資本の私有制度なり、曰く私的營業の自由競争制度なり、曰く経済的安心の動揺（生活の不安極言すれば衣食の欠乏より来るべき死の恐怖）なり、……土地資本制度の弊害あって、生産機關公有の議あり、自由競争制度の弊害あって、生産業公営の論あり、生活の不安あって、社会的生産分配の説あるにあらずや²⁶⁾」と。

第三部で議論は「余が觀たる現社会及び社会主義」に移る。河上はそこで、現在の経済組織が多く欠陥を有する半面、自由競争にも私有財産制度にも長所のある点を縷々のべた後、「然らば現時の社会組織を其儘に維持して、然もその弊害を去るべき方法には如何なるものありや²⁷⁾」と問い、物質的方面では慈善主義の範囲を拡大すること、個人の自由意志に基いて共同経済を拡大すること、国家の統制によって共同経済を拡大することの三点をあげ、トインビー館の事業、生産・消費・労働組合など、郵便・電信・電話・鉄道の国家による公営をそれぞれの実例としてあげる。そして第四に「私経済主義其物の範囲を其のままに維持しながら、然もその一面の弊を救ひ得べきの途²⁸⁾」として、「工場法乃至労働者保護法の制定」をあげている。以上の諸政策はいわゆる社会政策として各国で現に社会の弊態の救治策として行われている方法であるが、河上は最後にこれらの有形的物質的社会的方面に属するものの他に無形的精神的個人的方面に重要な政策ありとする、「曰く人心改良の大策」。これについて河上はいう、「余は人心内部の改善を以て、現時の問題を解決するため、寧ろ最も捷徑にして最も確實なる手段と認むるもの、是に於て乎余

は世上の教育家宗教家に向って一団の大不平なくんばあらず²⁹⁾」。

社会主義のよって来たる所以やその根本主張、さらに現在社会のプラス面を顧慮しつつその弊害に対処する社会経済の主義方策を列挙した末、ここに到って河上が「私経済主義そのものの弊を救ふ最も根本的対策」として提示するのが他ならぬ「人心の改良」策であった。

河上はさらに社会主義者の弱点の核心は「社会を組織せる各個人の利己心」にあると指摘し、キリスト教的社会主義を批判しつつ、自分が「頃日始めて神の全愛を悟了し得た」と告白、ここに「社会主義評論」を攔筆して伊藤証信の無我苑に入ることを読者につげる³⁰⁾。突然のこの告白は当然各方面に相当の反響をよび、河上は1906年1月に巣鴨に移転して無我苑の伝道生活をはじめ³¹⁾るのだが、ほどなく無我愛の主張に疑念をいだき、5月には自己批判を公表する³²⁾。翌年4月より『日本経済新誌』の主筆となってこの雑誌の経営と編集に従事するが、その過程で戸田海市の知遇を得、彼の推薦で京大講師の職をえて学界に入ることになるのである。

無我苑への入信と脱退という事件のあとも、河上の社会主義への関心はおとろえずに持続していたことは、その後の著作年表のしめす通り、このテーマに関する論稿が発表されつづけられていることでもわかる³³⁾。また彼は1908年12月社会政策学会第2回大会（東京）で講演しているが、この年以降社会政策学会でしばしば講演し、この学会の論客の一人として活躍した。そこで1907年から1915年までの彼の論文の中から、その社会主義論を見るうえで注目すべき三篇をとりあげて、その問題意識をうかがっておくことにしよう。

(1) 「社会主義論」、『日本経済新誌』第2巻第4・5・6号、1907年11月18～12月18日（全集第4巻所収）。

河上がここでのべている論点はいくつかあるが、ここでは「驚く可き社会党の発展」だけを取りあげる。河上は「近刊の社会新聞」によって、世界各国における社会党の投票数は1867年の3万票から急速に増加し、「1906年には無慮700万票に上った」とし、独逸の社会党が今年の総選挙で獲得した票数が1903年と比してさらに増加し、他の諸政党を圧して断然第一位の座を占めたことを図表でしめすとともに、他の欧米諸国でも同様の傾向にあることを詳説した後、つぎのようにのべる。「知るべし、社会党の勢力は鞏々乎として欧米全土に澎湃することを。知らず我が国の政治家は其の汎濫の余波独り我が国に及ぶなしとするかを」。さらに河上は「近着の米国『経済学雑誌』」の一文がスツットガルトでの万国社会主義者大会の光景を報道しているのを紹介してつぎのようにのべる。「今や社会主義運動は欧米諸国に於ては……一大勢力を有し来った。げに眼前に横はる処のものは、一個の戦闘である、断じて書籍でない³⁴⁾」。

(2) 「社会政策の哲学」、『社会政策学会論叢』第5巻「労働保険」、1912年5月（全集第5巻所収）。

河上はここで福田徳三が「社会主義は誤れりと雖も哲学を有し社会政策は正当なりと雖も哲学を有せず」としたことに反論し、社会政策は人間を他人の道具とせず個人を自存自立の目的を有せる人格として見る哲学を持ち、「この意味に於て云へば社会政策が敵視する所謂個人主義及社会主義とも共に同じ基礎の上に立つものである」とする。そしてこの三者の関係について、つぎのように説いている。三者は人を人らしくするという目的を達するが為の手段方法に於て異なる。「即ち個人主義はこれを実現する為には自由放任を主張します。反之社会主義は共同生活の手段方法に依っています。而して我社会政策に至ってはこれ等の中間に立つものであってこれ等二者

の長所を採って成るべく全々穏和の手段によって其発達を図らんとするものであります。如斯手段方法に差異があるによって或意味に於ては社会政策は又社会主義の敵とも云い得べきものであります³⁵⁾」。

(3) 「幕末の社会主義者佐藤信淵」、『京都法学会雑誌』第4巻第10号、1909年10月、『経済学研究』(博文館)、1912年12月に収録。全集第6巻所収。

河上は佐藤信淵(1767~1848)の『垂統秘録』によって、その社会主義論を紹介する。即ち信淵は垂統法の三原則により、(1)一切の売買貸借雇傭は私人之を営むを厳禁し、凡て之を国家の公営と為すこと、(2)凡ての国民は国家の官吏たるか、然らずんば国家の労働者たるべく、要するに国民を挙げて国家の直接使用人たらしむること、(3)一切の租税を全廃し、国家政務の費用は凡て事業公営の利潤の一部を以て之に充てることを主張するが、信淵がこの原則をどういう風を実現するのかを、河上は、階級の全廃、六府の設立による一切産業の公営、融通府による私人間の売買貸借の禁止の方法で実現されること、更に軍備も教育も貧民救済もすべて国家によって営まれることを説明する。河上は最後に、信淵が「若し夫れ天応じ時至り、英明の主出ること有て、国家を富盛し蒼生を済救するの志篤く、礼を以て聘すること有て、然後に此法に従事すべきのみ³⁶⁾」とのべているのを引き、「以て知己を百年の後に待ちしの志を見るべし」と結んでいる。

以上の三つの文章は、河上が『貧乏物語』を構想するに際していただいていた社会主義観をえがくうえに参考になるものであるが、最後に彼がヨーロッパ留学中の見聞がその構想にどう影響しているかが問題となる。在欧中の家族への通信や『祖國を顧みて』にあつめられた文章をみると、河上が各国の社会主義政党の大会に出たり党員と会ったりしたことも、各種の新聞・雑誌などの資料をあつめて運動の現状を調べたりしたこともなさそうである。河上にとって印象的だったのは、各国の社会政策がめざましく発展していることであつた。独逸では戦時経済を運営するに際し思い切った国家統制がとられたことや、イギリスでは貧困に対する戦争という意識がたつと、学校給食や老人年金が制度化されて伝統的な個人主義・自由主義に大きなくさびがうちこまれ、ロイド・ジョージのような新しいタイプの政治家が英雄視されていることであつた。『貧乏物語』のつぎの記述は、河上の強い留学体験の印象を表明するものであろう。「今や『国富論』の公刊をさることまさに百四十年、たまたま世界未曾有の大乱起これるを一期として、諸国の経済組織はまさにその面目を一変せんとしつつある³⁷⁾」。「戦時中の組織はおそらく戦争の終結とともに直ちに全くくずれてしまつて、すべてがことごとく元のとおりになるという事はあるまい。少くとも私はそう考える。それゆえ、私はブレンゲ氏とともに1914年はおそらく経済史上において将来一大時期を画する年となるであろうと思う³⁸⁾」。

VI

社会主義を伝道するという目的のために書かれたものとして『貧乏物語』をよむと、全体としてそこでは組織改造策としての社会主義が否定されているという印象が強く、河上の所期の目的に反すると見える。だが河上が「学問上よりいわば……個人主義に対するものは、これを名づけて社会主義といひおきてさしつかえなき道理なれど」わが国では「経済組織の基本として国家の

存在を認めず、もっぱら労働者階級の利益を主眼として世界主義を奉じ、はなはだしきは無政府主義を奉ずるものごとく思惟せられつつあるに似たるがゆえに、余はこれと混同せられんことをおそれ、特に社会主義なる語を避けて国家主義という⁴⁰⁾とのべているような配慮がはたらいっていることに留意しなくてはならない。「かのロイド・ジョージ氏の社会政策がしばしば社会主義と非難されたるも、社会政策の実施は多くは社会主義の一部的または漸進的実現と見なし得らるるがためである⁴¹⁾」といい、東大の渡辺鍔藏がドイツの戦時食料政策を「政府の権力をもっている社会主義の実行である」としているのに対し「社会主義の語が避けたければ、これを国家主義の実行と言ってもよい⁴²⁾」としていることに注目すれば、現在の西欧の社会が社会主義の方向に基本的に進みつつあることを河上は『貧乏物語』で説いていると見ることも出来るであろう。

『祖国を顧みて』は、はじめに「へめぐりてあまたの国をさまを見て住むべき国は日本とぞ思ふ」という短歌をかかげているように、欧州留学を通じて日本民族の優秀性や、その社会制度や文化に西欧と異なる誇るべき特性があることを説いたものである。たとえば「日本の社会組織には実に言ふべからざる面白味があって、西洋の社会の如く煉化石を積んだるが如き機械的の臭が全く無い⁴³⁾」、「欧人の互に国を分つ所以、吾等が東海の孤島に国を樹つと、固より同日の談ではない……例へば英人にしても、自分の国が亡びたならば、米国に渡って住むと云ふに左したる難儀はない。……単に此点のみかれ考へて見ても日本人の国家観念と西洋人のそれとは相違しなければ為らぬ筈である。……此国情の差異を弁へずして妄りに西洋思想の輸入を事とするは、吾等の切に慎まねば為らぬ所である⁴⁴⁾」とのべ、さらにつぎのようにしるしている。「吾々の祖先は永く此孤島に立て籠って、早くより日本国家を組織し……爾来実に二千余年の久しきに亘り、永く血液の純潔を維持して以て今日に到った。〔これ〕吾々をして始めて今日の日本人たらしめし所以である。されば二千五百年來万世一系の皇室を奉戴して居ると云ふ事は、決して吾々の意味なき虚栄ではない⁴⁵⁾」。

こうした信念をもって帰国した河上が、社会主義の実現の道をわが国に即して構想するとき、上掲のメモの結論にのべられたわが国独特の実現プランを考えたとしても不思議ではあるまい。その場合に彼が東大の大学院の時代に研究した佐藤信淵のビジョンが一つの想源となったと推測することも不自然ではなからう。

だが『貧乏物語』にはこうしたプランは全く姿を消している。そして最終的に貧乏＝社会問題の根本的解決策として河上が読者に提起するのは、『社会主義評論』の場合と全く同じ、人心改善策なのである。社会主義が二十世紀の最大の問題であり、これを解決することがわが国にとっても焦眉の急であるという意識をもって帰国した河上は、なればこそ社会主義の伝道を決意し、『大阪朝日新聞』に連載をはじめたのに、その結論は人心改善政策に終わってしまった——しかもその為の何の具体的政策も示さぬままに——のはどうしてなのであろうか⁴⁶⁾。

『貧乏物語』で河上はスミスの『国富論』とマルクスの唯物史観とを中心に、近代の経済思想史の流れをたどることに力を入れている。この点が『社会主義評論』とことなる『貧乏物語』の特色の一つである。ただ後者でも、スミスまで展開されてきた個人主義的経済思想が、マルクスの社会主義思想に向ってゆくという方向は示唆されてはいるが、どういう経路で移行するかについては説かれていない。

河上は1917年にスマートの経済と人生についての根本思想を紹介したり、ラスキンの *Unto*

*this Last*を紹介したり、J. S. ミルについての一文を発表したりしている。⁴⁷⁾このことは河上の中に個人主義から社会主義に経済思想がかわってゆく過渡期に人道主義的経済思想が歴史的役割をはたすのではないかという問題意識が芽生えつつあることを意味しないであろうか。この意識は『近世経済思想史論』（1919年）では未だ明確になっていず、『資本主義経済学の史的発展』（1923年）ではじめて明確に表明されるのだが、⁴⁸⁾『近世経済思想論』の段階でもすでに河上の念頭にあったことは、『思想史論』の講演ノートからはっきりとうかがえる。

『貧乏物語』ではたしかにスミスとマルクスとがいわば対照的におかれているだけで、二人を個人主義→人道主義→社会主義という思想史的関連の中で論ずるという手法をとっていない。⁴⁹⁾だが体制の根本的転換という事態が生ずるためには、経済観、道徳観、人間観の根本的転換がその前提として、またそうした体制の転換を円滑に実現する条件として必要であるという問題意識が当時『貧乏物語』の執筆過程で河上に強まってきたのではなかろうか。この点は河上の経済学についての——社会問題・社会主義についてのではなく——考え方の変遷をたどる別稿でも論じたいと思うが、河上は制度改造による社会主義実現を見るためには、経済思想がまず個人主義から人道主義への転換が必要である——金持や有識者、指導者の意識改造がとくに重要であるが、それも社会一般の経済意識の変革の中ではじめて可能であろう——という見通しをもっていたのではないか、彼の人心改造論の背景には、こうした経済思想の史的発展論があったのではないかという『貧乏物語』の読み方を、⁵⁰⁾ここでは一つの仮説として提示するにとどめる。⁵¹⁾

- 1) 杉原「日本経済学史上の『貧乏物語』」、『日本経済思想史研究会年報』第5号、1995年10月参照。
- 2) 小泉信三「貧困論——『貧乏物語』を読む——」、『三田学会雑誌』、1970年7月、『小泉信三全集』第1巻所収、文芸春秋1968年。福田徳三「解放の社会政策」、『解放』1919年6月号、福田『全集』第5巻所収。福田の『貧乏物語』批判については、杉原「福田徳三と河上肇」、『経済論叢』第124巻第5・6号、1979年11・12月参照。
- 3) 塩田庄兵衛編『『貧乏物語』の世界』、法律文化社、1983年。本書には、塩田庄兵衛、望田幸男、松尾尊兌、細迫朝夫、杉原四郎（『貧乏物語』の経済思想）、寿岳章子、真田是、一海知義、細川元雄、竹林忠男の10人の文章が収録されている。
- 4) 池上惇「いま、河上肇『貧乏物語』を読む——『貧乏物語』におけるラスキン思想の現代的意義(1)——」、『経済論叢』第144巻第5・6号、1989年11・12月。
- 5) 「河上肇と『貧乏物語』」、杉原・一海著『河上肇・学問と詩』、新評論、1979年所収、「『貧乏物語』小論」、『甲南経済学論集』第17巻第1号、1976年9月、杉原『日本経済思想史論集』、未来社、1980年所収、「日本経済学史上における河上肇——『貧乏物語』と『経済学大綱』を中心として——」、『経済理論学会年報』第17号、1980年所収、住谷一彦編『求道の人・河上肇』新評論、1980年や杉原『日本の経済思想家たち』、日本経済評論社、1990年にも収録。
- 6) 前掲「日本経済学史上の『貧乏物語』」でのべたように、『自叙伝』における『貧乏物語』の叙述はきわめてすくなく、本書の河上自身にとっての意義が消極的にしかとらえられていないように見える。だが本書は、マルクス主義者河上の立場からみても、はたして消極的な意義しかもたないものであろうか。
- 7) 『貧乏物語』（岩波文庫）の大内兵衛解説、第54刷、189頁。
- 8) 河上肇全集、第24巻、219頁。
- 9) 同上、219頁。河上が榊田宛書簡を榊田ふき夫人から借りうけ、「河上肇より榊田民蔵に送る書簡集」を編集した事情については、全集第24巻の解説（杉原四郎）569～570頁参照。
- 10) この講演の要旨は、『大阪毎日新聞』の1916年2月20日号と『救済研究』第4巻第2号（同年2月

25日発行)とに、また「経済学より見たる貧困」と題して『基督教世界』（1693号、同年3月16日）や、「貧困について」と題して『思潮』同年5月号とにも掲載された。なお「余の経済的国家主義」（『学友会誌』第15号、1916年3月20日）もこの「貧困」と内容が重複しているが、若干の異同がある。それについては全集第8巻、521～532頁参照。

- 11) 全集第8巻、376頁。
- 12) 全集第8巻、386頁。
- 13) 全集第24巻、43頁。
- 14) 全集第8巻、375頁。
- 15) 『貧乏物語』（岩波文庫、1965年改版、以下の引用もこれによる）、133頁。
- 16) 同上、131～132頁。
- 17) 同上、137頁。
- 18) 『貧乏物語』には「教育勅語」から「知能を啓発し徳器を成就し」……「公益を弘め、世勢を開く」という一節が「われわれの理想的生活」として引用されている。同上、139頁。
- 19) 同上、152～153頁。
- 20) 同上、109～111頁。
- 21) 同上、112～113頁。河上は1918年の『経済論叢』に「丁抹国ノ社会主義」（第7巻第3号、全集第9巻所収）と「独逸戦時社会主義」（第7巻第4号）を書いて、両国の事情を資料にそくして紹介している。
- 22) 同上、114頁。
- 23) 同上、115頁。
- 24) 「片山潜先生に呈す」、「社会問題社会主義ニ関スル欧米新刊書目一斑」（以上1902年）、「社会主義の勃興と其研究の必要」、「非社会主義論——二六新報掲載安部磯雄氏社会主義論を評す——」、「社会主義論弁を評す」（以上1903年）、全集別巻、117～118頁参照。
- 25) 全集第3巻、30頁。
- 26) 全集第3巻、47頁。
- 27) 全集第3巻、56頁。
- 28) 全集第3巻、66頁。
- 29) 全集第3巻、67頁。
- 30) 「社会主義評論」第36信（攔筆の辞）、全集第3巻77～86頁。
- 31) 全集第3巻の解題（大野英二）、518～520頁参照。
- 32) 「万水楼独語三」『読賣新聞』1906年5月27日、全集第3巻、230～231頁。
- 33) たとえば「社会主義論」、『明義』第5巻第10号1904年10月、全集第1巻所収など。なお当時の河上の社会主義に関する外国文献の翻訳については、杉原「訳者としての河上肇」、杉原『ミル・マルクス・河上肇』（ミネルヴァ書房、1985年所収）213～217頁参照。
- 34) 全集第4巻、177～181頁。
- 35) 全集第5巻、448～449頁。
- 36) 全集第6巻、347頁。河上の徳川時代の経済思想史研究の中で、佐藤信淵が特別に重要視されたことについては、杉原「河上肇の日本経済思想史研究」、杉原『ミル・マルクス・河上肇』（ミネルヴァ書房、1985年）所収を参照。
- 37) 在欧通信は主として岩国の父や弟にあてたもの（全集第24巻所収）であるためか、社会問題についての記述はない。『祖国を顧みて』の中では、ロンドンでフェビアン協会のバーナード・ショウの講演をきいた（その際、ウェッブやショウらの共著 *Socialism and individualism*, 2 ed. 1909 を買い求めた）文章が一つあるくらいである。全集第8巻、153頁参照。河上の在欧中の見聞については、杉原『「祖国を顧みて」小論——ナショナリスト河上肇——』（杉原・一海『河上肇 芸術と人生』新評論、1982年所収）、杉原「ロンドンの河上肇」、『甲南経済学論集』1983年10月）を参照。

- 38) 『貧乏物語』105頁。
- 39) 同上，120頁。
- 40) 同上，108～109頁。
- 41) 同上，133頁。
- 42) 同上，112頁。
- 43) 『祖国を顧みて』，（実業之日本社，1915年），全集第8巻，22頁。
- 44) 同上，44～45頁。
- 45) 同上，51頁。
- 46) この問題を考えるためには『貧乏物語』を，日本の初期社会思想史の中において，その発展過程にそって広い視野からとらえかえす必要がある。この点で萩野富士夫『初期社会主義思想論』（不二出版，1993年）の河上肇論は参考になるところが多い。
- 47) 全集別巻の著作年表，147～148頁参照。
- 48) 山之内靖は『近世経済思想史論』の解説で，京大経済学部の河上肇文庫にあるこの講演のノートについてつぎのように書いている「ノートには，第二講『マルサス及びリカアドー』と第三講『カアル・マルクス』の間に一枚の覚え書きがはさまれている。この覚え書きは，第二講と第三講との間をつなぐとすれば，いかなる論点がとりあげられるべきであるかを示した，簡単な年代表なのであるが，その中に我々は次のような記載を読みとることができる。『Mill, mental crisis — Carlyle, 1843, Past and Present — 1848年, J. S. Mill 原論出づ。K. Marx の共産党宣言出づ。仏国の二月革命。 — Charles Dickens, 1854, Hard Times, — 1860, Ruskin, Unto this Last. 1872年, Munera Pulveris.』この覚え書きが物語っているように，『近世経済思想史論』を執筆した時点においてすでに，河上は後に『資本主義経済学史的発展』（大正12年）の第五章でとりあげることとなるJ. S. ミルおよびカアライル，ラスキンの三者を，彼の経済学史において位置を占めるべき重要な人々として予定していたのであった」。全集第10巻，526頁。1919年帝国教育会の夏期講習で河上のこの講義に出席した大久保利謙は，J. S. ミル，カーライル，ラスキンのことは「わたしの聞いた講義ではたしかに言及されていた」と回想している。大久保『日本近代史学事始め』，岩波新書，1996年，52～53頁参照。
- 49) 『貧乏物語』にも，カーライルは出てこないが，ミルとその『自叙伝』は，またラスキンと彼の『此最後の者にも』の“*There is no wealth, but life*”という一文はすでにあらわれている。5頁，156頁を参照。
- 50) 『近世経済思想史論』と『資本主義経済学史的発展』との比較，両者の特色と，前者から後者への推移などについては杉原「河上肇と古典派経済学」（『西欧経済学と近代日本』，未来社，1972年所収）を参照。そこで詳論しているように，河上が自分の経済学史の体系の中に「ジョン・ステュアート・ミル附り，カアライル及びラスキン」という章をもうけて，彼ら三人の人道主義的経済思想を「社会主義の母でなければ，少くとも父であり得る」（全集第13巻，326頁と評価したのは，後者つまり『資本主義経済学史的発展』においてであるが，河上が榊田民蔵あての1924年6月16日づけの手紙の中で「『資本主義経済学史的発展』は，私の頭がシッカリせぬうちに……ああいふ構想が出来上ったので，その構想の骨子は畢竟貧乏物語時代に在るのです」と認めていることを顧みる必要があるであろう。『西欧経済学と近代日本』，261～262頁参照。
- 51) 杉原「河上肇における経済原論・経済学史の研究と講義」（『愛媛経済論集』第15巻第1号，1996年3月）を参照。